

岐阜県におけるタケ類テングス病の発症状況

The incidence of bamboo disease “Witch’s broom” in Gifu Prefecture

○河合洋人(岐阜大・流域圏科学研究センター), 粟屋善雄(岐阜大・流域圏科学研究センター)

1. はじめに

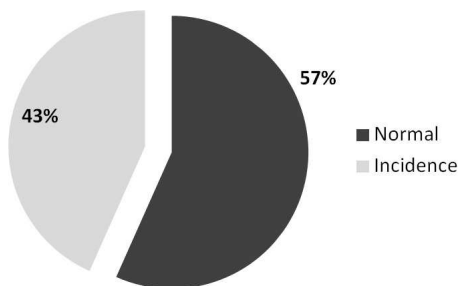
タケ類は里山を構成する主要な植物の一つであるが、1990年代後半より竹林の拡大現象が報告されており生態系や景観への様々な影響が指摘されている。近年、タケ類テングス病（以下テングス病と略す）による枯損が顕在化しているとの指摘がある。兵庫県以西の西日本におけるマダケ林の発症率は93.2%であった（橋本ら，2008）との報告があり、西日本以外の中部や東日本など、その他の竹林が存在する地域においてもテングス病発症の可能性がある。テングス病は最終的に竹林全体を枯損させる病気であるため、竹林管理において憂慮すべき問題であり、早急な発症状況の把握が必要であると考え。そこで岐阜県におけるテングス病の発症状況を明らかにするため、現地調査を実施した。

2. 研究対象地と方法

研究対象地は岐阜県高山市・郡上市・下呂市・七宗町・岐阜市・揖斐川町・関ヶ原町・美濃市・美濃加茂市の6市・3町である。Google Earth®を使用して各対象地より竹林の目視判読を行った。判読した竹林に番号をつけて、そのうち奇数番号の竹林を現地調査の対象とした。調査対象竹林の数は各対象地が最低7カ所を確保するようにし90カ所の現地調査を実施した。現地調査は対象竹林において竹種・混み方（1～5で評価、1がもっとも密度が低く5が最も高い）・テングス病の進行レベル（1～7で評価、1は発症無し、7は発症しほとんどの竹が枯損している）・植生について目視による判定をおこなった。これらの判定基準は「竹林の健康診断ガイド」（NPO法人緑と水の連絡会議作成）に従った。また竹林タイプ（里山・河川敷・市街地）についても判定をおこなった。

3. 結果と考察

調査を実施した90カ所のうち発症を確認した竹林は39カ所であり全体の発症率は「43%」となり（Fig 1）、岐阜県においてもテングス病の発症を確認した。市町村別の発症率にみると、岐阜市が「63%」と最も高く、次いで下呂市「50%」となり、高山市が「22%」と最も低かった。各対象地におけるサンプル数が異なるため明確な判断は難しいが、発症率はおおむね「北低南高」の傾向が見受けられる。竹種別にみるとタケ類はマダケ（*Phyllostachys bambusoides*）・モウソウチク（*Phyllostachys pubescens*）・ハチク（*Phyllostachys nigra*）の3種、ササ類はメダケ（*Pleioblastus simonii*）の1種が確認された。このうちマダケとモウソウチクの発症率はマダケ「70%」、モウソウチク「0%」となった。混み方レベルの平均値をみると発症した竹林は「4」であり（密度が高く、倒伏した竹があるため竹林内を歩くことが困難なレベル）、発症していない竹林は「2.7」であった（やや本数が多く、歩きにくい倒伏した竹はほとんどないレベル）。従ってテングス病を発症した竹林は竹種がマダケであり、混み方のレベルが発症していない竹林よりも高いという特徴が認められた。



引用文献：橋本佳延・服部保・岩切康二・田村和也・黒田有寿茂・澤田佳宏（2008）
タケ類天狗巢病による西日本の竹林の衰退
保全生態学研究 13：151－160

Fig 1 Incidence rate of witch's broom in Gifu prefecture